

平成 30 年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果

小西 哲郎 (がくさい病院神経内科)
杉山 博 (NHO 宇多野病院神経内科)
山川 勇 (滋賀医科大学臨床神経生理学講座)
杉江 和馬 (奈良県立医科大学神経内科)
楠 進 (近畿大学医学部神経内科)
豊岡 圭子 (NHO 刀根山病院神経内科)
井上 学 (大阪市立総合医療センター神経内科)
狭間 敬憲 (NHO 大阪南医療センター神経内科)
吉田 宗平 (関西医療大学神経病研究センター保健医療学部)
舟川 格 (NHO 兵庫中央病院神経内科)
関口 兼司 (神戸大学大学院医学研究科神経内科)
浅田留美子 (大阪府健康医療部保健医療室地域保健課)

研究要旨

1. 平成 30 年度近畿地区において、86 名 (男 16 名、19%、女 70 名、81%) の「スモン現状調査個人票」を集計した。86 名の平均年齢は 81.9 + 8.2 才 (57 ~ 100 才) (男 80.2 才、女 82.2 才) で、81 才以上の高齢者が 53 名 (男/女 : 8/45) と全体の 6 割以上を占め、91 歳以上の超高齢者は 10 名 (12%、男/女 : 3/7) であった。
2. 近畿地区全体の検診率は 40% (86/214) であるが、大阪府の特定疾患交付数が健康管理手当等受給者数より 30 名程度多いため、実際の検診率は 35% (86/244) 程度と思われた。今年度も患者数の多い府県での検診率向上が課題であった。
3. スモン患者全員が身体的併発症を有し、各種併発症のうち、心疾患・脳血管障害・糖尿病が加齢で増加した。腫瘍経験者は 30 名 (35%) (男性 5/16、31% ; 女性 25/70、36%) であり、女性 4 名と男性 2 名には 2 個の腫瘍がみられた。腫瘍部位では、男性では大腸 (3 名)、女性では乳房 (8 名)、大腸 (10 名) が多く、大腸のうち大腸ポリープの経験者が 7 名 (男性 1、女性 6) に見られた。
4. 骨折経験者は 24 名 (28%) で、頻度が多い骨折部位は、男女とも腰椎圧迫骨折であった。
5. 介護保険申請者は 56 名 (65%) で、申請者の認定内容は 77% (43/56) が要介護度 3 以下と認定された。介護保険の認定介護度の推移では、近年要介護 4 と 5 の頻度が増加してきた。認定介護度については、6 割以上 (35/56) の患者は妥当と感じているが、30% (17/56) の方が認定介護度を軽い方に認定されたと感じた。
6. 在宅療養状況では、入所者を含め検診受診者の 48% が独居者であり、多くは女性であった。施設入所者を除く独居者の平均年齢は 83.8 歳と高齢化していた。
7. 以上の結果、近畿地区の検診率は 4 割以下であるが、患者数が多く検診率の低い府県で

の在宅療養状況の把握が課題であった。腫瘍経験者は35%で見られ、腫瘍罹患部位では、男性では大腸と胃、女性では乳房と大腸の罹患者が多く、頻度の高い腫瘍に注意すべきである。検診受診者の在宅療養状況では独居者が約半数を占め、多くは女性独居者であった。自立度が低下した独居者の在宅療養環境調査や在宅支援体制を整備する必要がある。

A. 研究目的

平成30年度の近畿地区のスモン現状調査個人票を集計し、スモン患者の医療上および在宅療養環境の問題点を明らかにする事を目的とした。

B. 研究方法

平成30年度に、近畿地区班員によって近畿地区の各地域で実施されたスモン検診において作成された「スモン現状調査個人票」を集計し分析した。

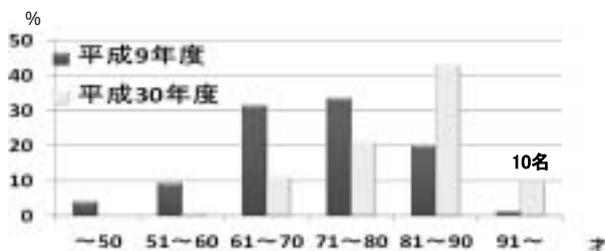
(倫理面への配慮)

スモン現状調査個人票の内容のデータ解析・発表に際しては口頭あるいは署名により同意を得た個人票のみを使用することで、倫理面への配慮を行った。

C, D. 結果と考察

検診受診率関連

平成30年度の近畿地区では、検診を行った86名の平均年齢+SDは81.9+8.2歳(57~100歳)(男80.2歳、女82.2歳)であった。81歳以上の高齢者は53名(男/女:8/45)であった。H30年度とH9年度の受診者の平均年齢を比較すると、21年間で平均年齢が10.9才上がり、81才以上の割合が22%から62%に増大した。(図1)。91歳以上の超高齢者は10名(12%、



	総数	平均年齢	男	女	81歳以上
H9	149	71	24%	76%	22%
H30	86	82	19%	81%	62%

図1 平成30年度と平成9年度の年齢分布の比較
21年間で平均年齢が11才高齢化し、81才以上の割合が22%から62%へ増加した。91歳以上の超高齢者は10名であった。

男/女:3/7)で女性が多かった。

府県別検診者数の推移

毎年府県別検診受診者は減少傾向を示しているが、近畿地区全体の検診率は40%程度が維持されている(図2)。しかし、大阪府のスモンの特定疾患交付数が健康手当受給者数の77名より30名多い107名であることから、近畿地区のスモン患者は214名より30名程度多い244名前後と考えられた。そのため近畿地区

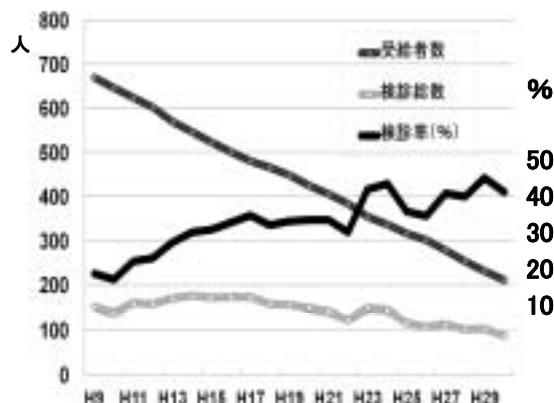


図2 H9からH30の近畿地区年度別、健康手当等受給者数(受給者数)、検診総数および検診率(%)の推移
受給者数および検診者数は減少傾向であるが、検診率は約40%が続いている。

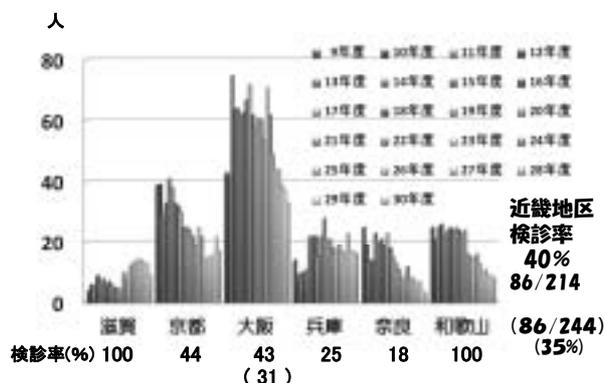


図3 H9からH30年度の府県別検診者数の推移
滋賀県と和歌山県では検診率が100%であったが、患者数の多い大阪府・兵庫県および京都府・奈良県での検診率の向上が課題であった。

のスモン検診率は35% (86/244) 程度と思われた。滋賀県と和歌山県では検診率が100%であったが、患者数の多い大阪府・兵庫県および京都府・奈良県での検診率の向上が課題であった (図3)。

京都府における過去3年間のバーセル指数

京都府在住患者39名の過去3年間 (H28、9名；H29、14名；H30、16名) のバーセル指数の分布では、11名 (28%) が60点以下であり、平均年齢は86.7歳と京都府平均の80.7歳より6歳高齢であった (図4)。独居者は7名 (18%)、施設入所者は9名 (23%) で、独居あるいは施設入所者が4割を占めた。独居者のバーセル指数の総点数は65点以上であり、60点以下の独居者がいないことから60~65点が独居生活が可能か否かのカットオフ点数になると思われた。

スモン併発症関連

併発症は86名全員に認められ、高血圧と心疾患、脳血管障害、糖尿病は加齢とともに罹患頻度が増大した。

腫瘍経験者は30名 (35%) (男性5/16、31%；女性25/70、36%) であり、女性4名には2個の腫瘍があり、男性2名には2個の腫瘍がみられた。腫瘍の部位

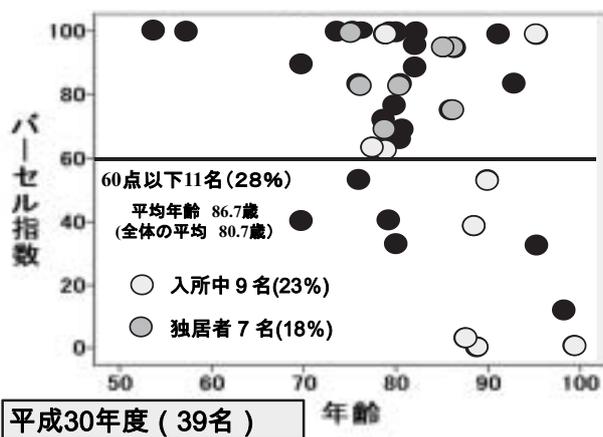


図4 京都府下在住スモン患者39名の過去3年間における最新のバーセル指数合計点 (縦軸) と年齢 (横軸) の分布図。独居者7名 (灰色) と施設入所者9名 (白) を表す。独居者のバーセル指数の総点数は65点以上であり、60点以下の独居者がいないことから60-65点が独居生活が可能か否かのカットオフ点数になると思われた。バーセル指数合計点が60点以下は11名 (28%) で、11名の平均年齢は86.7歳と京都府平均の80.7歳より6歳高齢であった。

は、男性では大腸3名、胃2名、甲状腺・耳下腺が各1名であった。女性では大腸 (10名)、乳房 (8名) の罹患者が多かった (表1)。特に、女性では大腸ポリープが6名に見られた。

骨折経験者は24名 (27.9%) で、圧倒的に女性に多く (男2/女22名) 81歳以上の患者で骨折経験者が多かった。頻度が多い骨折は、男女とも腰椎圧迫骨折であった。

介護保険関連

86名のH30年度の介護保険申請者は65.1% (申請中含む56名。不明を含むと59名で68.6%) であり、認定内容では76.8% (43/56) が要介護度3以下と認定された。平成19年からの認定介護度の年度ごとの推移をみると、4~5年前から要介護4や5の割合が

表1 男女別腫瘍併発患者数

男性		女性	
部位	人数	部位	人数
大腸 (ポリープ)	3(1)	大腸 (ポリープ)	10(6)
胃	2	乳房	8
甲状腺	1	甲状腺	2
耳下腺	1	肺	2
		胃	1
		子宮	1
		十二指腸	1
		その他	3

罹患部位では、男性は大腸と胃が2名以上で、女性では大腸と乳房頻度が高かった。

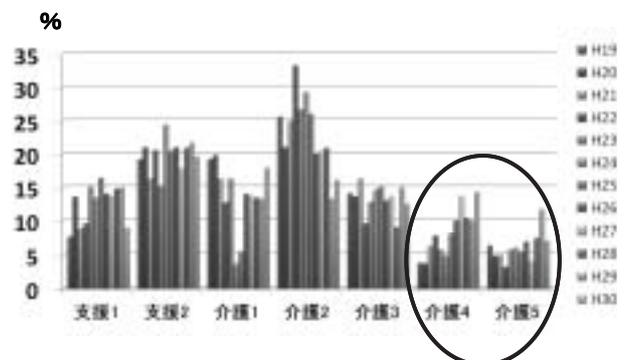


図5 平成19年度以降の年度別各認定介護度の頻度 (%表示) 毎年、認定介護度の要介護3以下が全体の7~8割を占めるが、4~5年前から要介護4と5 (○囲い) の介護度の高いスモン患者が増加している。

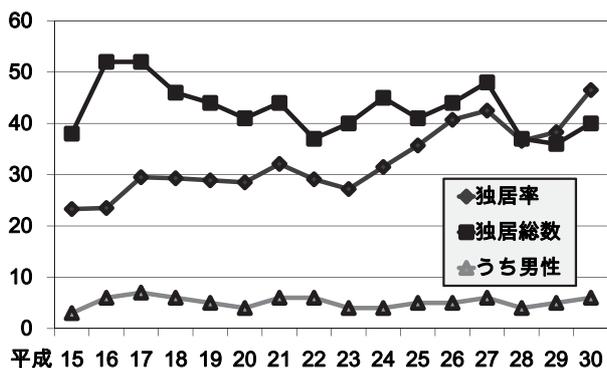


図6 H15年度からの年度別の独居者総数、男性独居者数と独居者比率（独居率）の推移

独居者の8割以上は女性独居者である。10年前から独居者総数は約40名、うち男性は5名前後で推移しているが、独居率は5年前からそれまでの3割から4割に上昇した。

増加し、スモン患者の一部では身体障害が重症化していることを示していた（図5）。認定介護度の妥当さに回答した6割以上（35/56）は、認定介護度が妥当であると感じたが、約3割（17/56）は思ったより軽い介護度に認定されたと感じた。

在宅療養状況

在宅療養状況では、86名の検診受診者の46.5%（40名）が独居者であり、独居者の多くは女性（男/女：6/34）で85.0%を占めた。平成15年度以降の独居者の経年推移を見ると、10年前から独居者総数は約40名前後で、うち男性は5名前後で推移していたが、独居者比率（独居率）は5年前からそれまでの3割から4割に上昇した。（図6）。近畿地区在住86名の患者の療養状況のうち、同居人数の調査結果は、独居40名（47%）、二人暮らし29名（34%）三人以上16名（19%）であった。府県別の施設入所者と一人暮らしの割合を見ると京都と奈良の比率が低かったが、和歌山が56%と半数を超えた。検診受診者の平均年齢が81.9歳に対して施設入所者を除く一人暮らし（33名）の平均年齢は83.8歳と2歳高齢化していた。

E. 結論

平成30年度の近畿地区スモン検診の結果、検診受診者の平均年齢は81.9歳となった。91歳以上は10名（12%、男/女：3/7）で、最高齢者は100歳の女性であった。

検診受診者全員が併発症を持ち、併発症のうち悪性腫瘍経験者は約1/4の患者で見られ、特に81歳以上の高齢者で頻度が増加した。腫瘍の部位では、男女ともに大腸が多いが、男性では胃がん、女性では乳がんの罹患者が多く、高齢者ではこれらの頻度の高い部位の悪性腫瘍に注意すべきである。

介護保険申請者は高齢化に伴って増加し、約2/3の患者が申請した。多くのスモン患者は要介護度3以下に認定された。4～5年前から要介護4と5の高度な介護を必要とする身体障害が高度な患者の割合が増加しており、高齢化による自立度の低下を反映していると考えられた。検診者の在宅療養状況では、約4割が独居者で、自立度の低い独居者の在宅療養環境調査や在宅支援体制を整備する必要がある。

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし